

陽明文庫本「大手鑑」に押された連歌資料二点について

岩 下 紀 之

古筆研究者にとって、数多の切をおさめた手鑑が貴重な資料であるのは自明のことである。その他国文学の徒にとつて、平安鎌倉の書跡は、たとえ断簡といえ本文校勘のためゆるがせにできない。ところで我々連歌研究者にとつても手鑑に押された切が貴重な研究材料であることにかわりはない。

さて、今刊行中の、古筆手鑑大成第一巻で、徳川美術館蔵の手鑑「鳳凰台」について、徳川義宣氏はこのように解説しておられる。「とにかく江戸期に編輯された手鑑は、室町後期から桃山・江戸初期の作を多く含み、内容も連歌・俳諧・和歌短冊等が少なくないものであるが、この手鑑はそれらを一点も含まず、その編纂の志の高かったこと、内容を限定し高度の質を保たうとした意図が十分に窺はれる。」連歌研究者からみると、連歌の書跡を含む手鑑は、あたかも編纂の志が低く、高度の質を保たないように聞えて聞き捨にできない。なるほど骨董品としての価値は、室町時代の筆跡にさほど期待することはできない。平安朝の仮名文字の美はまぎれもなく、俊成・定家の筆跡は一行といえどもはかり知れない

重要性がある。時代の降った連歌の切では、到底その光を比べることはできない。しかし連歌というジャンルが、日本文学において欠くべからざる一翼を担っていることは論を俟たない。この陽明文庫本を作った予楽院のような人が、「大手鑑」に連歌師の筆跡を数点おさめているのである。

また、骨董的価値がさほどないというのは、逆に極められた人物は単なる当推量でない可能性が高いということも言えるかもしれない。宗長筆などという偽物を作ったところではかたがないのだから。特に陽明家||近衛家にしてみれば、応仁の乱以後の連歌師などは、ほんの昨日の人物であつて、わざわざ購ひ求めるまでもなく、自家に手持の書跡のあつた可能性が強いのである。現にこの「大手鑑」に肖柏・宗祇の書状が含まれるが、いずれも近衛家に宛てられたものである。

以下に誌面を借りて、連歌資料二点を取り上げ論じてみたい。なお「大手鑑」は淡交社版の豪華本があつて、全部のカラー版写真と、別冊として翻字と詳しい解説が添えられている。他に陽明叢書15としても刊行され、これにも解説がされ

ている。したがってここに論ずるのは少しばかりの補足にとどまるのである。

二九一番 素眼法師

「

老ぬれは花さかぬ木に身をなして
藤原 貞直

春の草年／＼庭のあれしより

神 為清

我さへとも故郷の花

明はやすきかねの声哉

藤原 時綱

春の夜もねさめは老のならひにて」

右は「菟玖波集」卷十二・雑連歌一の一部で、金子金治郎博士「菟玖波集の研究」に収められた広島大学本番号では、一〇五〇付句から一〇五二までにあたる。

「菟玖波集」は准勅撰集であるにもかかわらず、室町時代書写の写本の完本が伝わらない。伝素眼筆の写本として、横山重氏蔵の卷十四、書陵部蔵の卷二十があり、これは南北朝の写本と見られているものである。これと別に室町期の書写とされる本として、書陵部蔵の卷十七、卷十九のいずれも断卷がある。これも素眼法師という極めがあり、極書には木村見室の印章が押捺されている。古筆見の人々は、室町以前の「菟玖波集」は、素眼と鑑定することに決めていたようであ

る。そこで伝素眼筆の「菟玖波集」は、少なくとも二種類存在することになるのであるが、前者南北朝写本は当然ながら本文としてきわめて優れており、他の「菟玖波集」写本の本文を評価する際の基準になっている。この手鑑の切はこちらのほうのつれと思われる。

同じ部分を善写本とされる広島大学本と比較してみよう。これは江戸期に降る書写である。

(むかしの春そ人にとはれし)

藤原 貞直

(二〇) 老ぬれは花さかぬ木に身をなして

春の草年／＼庭のあれしより

神 為清

(二一) われさへともふるさとのほな

あくるはやすき鐘の音かな

藤原 時綱

(二二) 春のよもね覚は老のならひにて

照合してみると、本文の異同としては一〇五二前句の「鐘の音」が伝素眼本で「かねの声」となっている箇所があげられる。福井久蔵「校本菟玖波集新釈」によれば、大部分の写本で「音」になっている。また伝素眼本のこの句「明は」は誤写とは言えないだろうがやや乱暴な表記であって、広島大学本ならびに「校本」に見える全写本のように「あくるは」と読むべきであろう。全体的に両者がよく一致しているのは、この広島大学本の優秀性を物語ると評価しうる。

なお慶安年間に出版された「御手鑑」にも伝素眼筆「菟玖波集」切がおさめられている。

「草の名も所によりてかはるなり

救済法師

難波のあしは伊勢のはま荻

あしやの興に船そたたよふ

道生法師

風より風こえて

これは巻十四・雑連哥三の一部である。この巻は横山重氏蔵の伝素眼本が伝来しており、伝素眼本が二本あることになるのである。横山重氏本を引用してみると（番号は広島大学本による）

草の名も所によりてかはるなり

救済法師

二二三 なにはのあしはいせのはまをき

あしやのおきに舟そたたよふ

道生法師

二二三 すさきなる松の梢に風こえて

全体に漢字と仮名の宛て方が異なり、二三三三付句は写し違いがあるようである。また、木版本のものと筆跡を追求するにも限界があることでもあり、この「御手鑑」の切については慎重な評価が必要であろう。

いずれにしても伝素眼本が目下のところ「菟玖波集」写本

中の最古のものであることは揺がず、今後ともこの種類の切の出現が待たれるのである。

三〇二番 宗長法師

「立かへりなかは

都そほとよきす

みすのみとりの

軒のたちはな

袖ふるゝ扇に

月もほのめきて

まねくはみすや

くるゝ川ふね

玄清

兼載

宗祇

恵俊

連歌懐紙の切である。明応四年正月六日興行の「新撰菟玖波集祈念百韻」の、三裏七句目から十句目にあたる。この百韻は統群書類従連歌部におさめられて周知の作品であり、写本も多い。さらに近年は、島津忠夫氏によって新潮日本古典集成の「連歌集」に注解を付しておさめられた。又同氏による論文『「新撰菟玖波集祈念百韻」——連歌本文の異文のことなど——』（「連歌と中世文芸」所収）により、一層くわしく論じられている。所論によれば、多数の写本は統群従本系と神宮文庫蔵「百韻連歌集」所収本系の二系統にわかたれるとのことである。新潮日本古典集成本は、後者を底本とされている。

連歌の興行形態からみて、百韻の本文は一つの原本がある

と考えてはならず、その一座に出座した人々の数だけの平等な価値のある原本群がありうるであろう。このことは小西甚一氏の考察が広く受け入れられている。しかしこの百韻の場合、現存の諸本の書写年時は、もともとも古いものでも室町末期に降ってしまう。一般に写本は古ければ古いほど価値があると見なされる。転写回数が少いと推定されるからである。この切は、この百韻の連衆の一人である宗長の筆と伝えられているものである。仮に真跡でないとしても同時代の写であると思われるから、他の写本よりおよそ五十年ほどは古いものである。

神宮文庫本の本文を引用してみよう。

七 おちかへりなかは都そほととぎす

八 みすはみとりの軒のたち花

九 袖ぬるゝ扇に月もほのめきて

一〇 まねくは見すやくるゝ河つら

まず七句目は「立かへり」と「おちかへり」の違いがある。

「おちかへり」は大変な難語であって、島津氏は「堀河百首聞書」を引いて「しきりになげこそ都の夏ともいえようものを」と解釈されているが、「立かへり」であれば何も問題はなくなる。八句目「みすのみとり」と「みすはみとり」は助詞の異同があるけれども、どちらがよいとも決めかねる。

九句目「袖ふるゝ」と「袖ぬるゝ」は、「ぬるゝ」では意味が通じにくい。涙で袖がぬれるくらいに解すべきか。島津氏は底本をふるゝに訂正されている。十句目「川ふね」と「河

つら」はどちらとも決めかねるが、島津氏の頭注によれば、平松本等も「川舟」であるよし。以上小さな異同が各句にあるが、どちらかと言えば「大手鑑」中の切の方が、すぐれた本文を持つように思う。いかがであろう。

宗長真筆であるか否かは、他の確認されたものと比較検討しなければならぬ。現在刊行されていて容易に見ることのできる筆跡としては、伏見宮家旧蔵「短冊手鑑」、「古文書時代鑑」、「日本書跡大観」などにおさめられている。筆者には真偽の鑑定をする能力がないが、「短冊手鑑」と、この「大手鑑」とは、宗長筆と鑑定するのにふさわしい、公家社会における、江戸時代前期の鑑定であることを指摘しておきたい。

(いわした・のりゆき／非常勤講師)

△愛知淑徳大学助教授▽